

支島長の手紙

題字は毎日書道展
審査員
世野 舟橋氏

先週金曜日、小鳥のさえずりが聞こえるのかな岡山空港から、一機の旧式ジェット機が青空に飛び立つのを感じを覚えながら見送りました。

AMDA (アジア医師連絡協議会) や「72時間ネットワーク」などがチャーターしたエアロフロート機です。先月二十七日、ロシア・サハリン州で起きた大地震の被災民救援のための第二次医療チームと医薬品や救援物資約十トンを積んで、サハリン州のユツノサハリンスタに直行したのです。この大震災に対するAMDAの反応は素早く、直後に第一陣医療チームを送り込んでいますが、全国からの救援の医師や物資を岡山空港に集結させ、チャーター

便で直接海外の被災地に送り込んだのは、初めての事です。私が、旧式でもこのジェット機に感動を覚えたのは、今後岡山が、AMDAを核としてNGO(非政府組織)のメッカとなり、世界に通用する「国際貢献都市オカヤマ」になる、そんな夢を乗せた「歴史的なテークオフ(離陸)」のような気がしたからです。

ご存じのように、AMDAは、岡山市楠津で曾波内科医院を開業する曾波茂医師を中心に、一九八四年に発足した民間の国際協力団体です。現在アジアの支部は十五カ国、会員は医師を中心にして国内約七百人、海外二百人に広がっています。カンボジア、ネパール、

ソマリア、ルワンダ……と、世界の紛争地にAMDAの多国籍医師団あり、と言っているほどその活動は迅速で、国際的には「知る人ぞ知る」の存在です。しかし、その本部がある地元岡山も含めて国内的には、民間ボランティア活動・NGOへの認識が不十分なこともあり、その活動の割には県民の理解はもうひとつだな、というのが一年前岡山に来た時の率直な印象でした。

その存在を一気に国内で知らしめたのは、皮肉なことに阪神大震災でした。これまでの海外の救援活動の経験を生かしてとこよりも早く被災地に医療チームを送り込んでの活躍は、厚生省をはじめとしたお役所仕事があるのら分、新鮮なイメージを与えました。そんな意味からも阪神大震災は、若者をはじめ多くの人がボランティア活動に参加し、今年にはNGOが日本社会に認知されたボランティア元年」と言えるかも知れません。

岡山からオカヤマに

素早い対応を見せました。立正佼成会は一千万円、アフリカへ毛布を送る会は、毛布三千六百枚、医師、薬剤師も京都、大阪、鹿児島と全国から、さらに被災地神戸からも阪神大震災地元NGO推進連絡会議のメンバーが同じ痛みを知るものとして駆けつけました。岡山県航空協会も、異例のチャーター便離陸に奔走しました。普通なら申請から許可まで三カ月かかるころが、三日で離陸出来たのです。

また阪神大震災が起こる前の昨年暮れ、曾波代表から「岡山空港を難民の救援援助などで、全国のNGOスタッフが物資や資材を携えて飛び立っているアジアで唯一の国際貢献基地にした」という構想を聞きました。阪神大震災における岡山空港の役割そして今回のサハリン。構想よりも現実の必要性が先行し、岡山の一民間団体の活動が核になって、新しい風が全国に吹き出し、突風になりつつある、そんなダイナミックな動きを感じます。

も、それを有効、迅速に生かす国内のネットワークが不十分だったのも事実で、阪神の教訓から、災害発生から七十二時間以内にかに被災地での救援活動を行うかについて、国内のNGOが十月の発足に向けて準備を進めていました。

サハリンの大震災はそんな最中の「まさにカウンターパンチ」だったわけですが、発足前でも、各グループは、

全国の救援隊が岡山空港から世界へ、また内外の若者がNGOを勉強するため岡山を訪れ、一層たくましくなって全国に散って行く。そんな国際貢献都市オカヤマの実現。大空に消えて行く機影を追いながら、それは夢ではなく、表現可能、と思えたのですが、どうでしょうか。

(岡山支局長 中島 耕治)